

映画「最後の決闘裁判」(Facebook, 2021. 10. 19)

1386年にフランスであった実話を元にした映画「最後の決闘裁判」を観た。決闘裁判そのもののリアルさも、またそこに至る双方の真実の主張も実際にそのようなものであり得たのではないかと思わせるような、フランス中世に興味関心をもつ者にとっては非常に勉強になる映画であった。

奥方が犯されたという事件の、犯したとされる本人と奥方の夫との決闘であり、本人(敗者)の言い分は、肉体関係そのものの否定ではなく、自分は押し入って無理やり関係を求めたのは事実であるが、最終的には奥方も肉の喜びを共有した、という主張。(分かりやすく言えば「合意の上だった」という主張)

片や「強姦された」、片や「強姦ではなかった」という主張であり、言わば女性の心の内の問題なので、訴え出られた国王シャルル6世は、どちらの立場も証明することが難しく、もはや人の手で裁くことが不可能と判断したからこそ、神の手に委ねる決闘裁判を許可したのであろう。